

フライブルクのマーチン門

田辺 ゆかり エッセイ集

文化教育新聞社

目次

ゆかりの絵手紙だよ

フライブルクのマーチン門	1
NZ南島グレンレア農場	3
孫よ！ 娘よ！	5
古き良きものたち	7
また明日を生きよう	9

思い出に包まれて

世界史のテスト	11
縁とは不思議なもの	12
須磨ニュータウン	13
夢のハワイ	14
神戸弁と大阪弁と関東弁	15
私の白地図	16
六甲全山縦走	17
Goshopping!	18

NZに一目惚れ	19
自然体でゆるゆると	20
自立の第一歩	21
「2・22」と「3・11」	22
洗濯機事件	23
車でお出かけ	24
夜空を仰ぎながら	25
プラトン曰く	26
注文の多い理髪店	27
「どこちらまで」	28
贈り贈られ	29
手を合わせて	30
信じる？ 信じない？	31
「大丈夫、大丈夫」	32
サプライズをあなたに	33
「あ」「ん」のご縁	34
思い出に包まれて	35
初出一覧	36
ゆかりさんの「ゆ」	37



フライブルクのマーチン門

初めてお便りします。お元気ですか。

縁あってこの手紙を書いています。私の名前は、よいご縁がたくさんあるようにと、両親がつけてくれました。私は、日々、縁の不思議を感じています。この道を通っていなかったら、同じテールでなかったら、あの広告を見ていなかったらと思うと、出会うということの偶然が不思議でなりません。

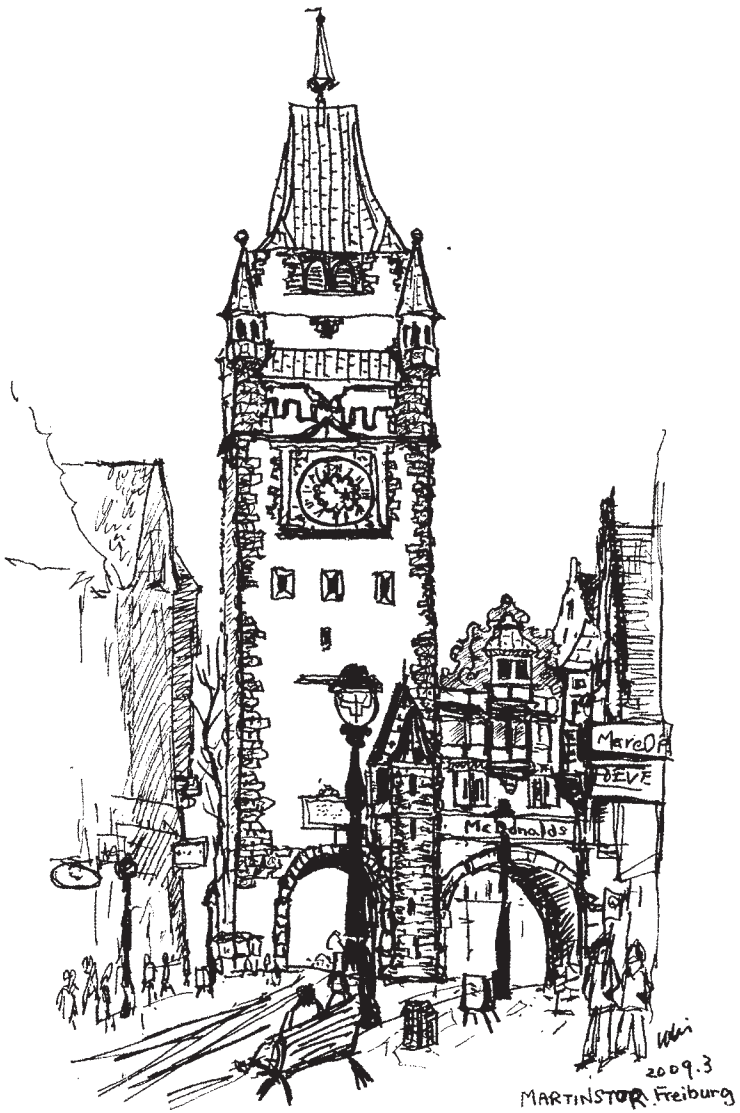
このスケッチは、ドイツ南西部のフライブルクの昔の門を旧市街地の内側から描いたものです。フライブルクは環境保護の街として有名ですが、観光ルートでもないこの地に二度も行き、同じ通りを歩きました。娘が縁あってフライブルク大学の大学院で学び、今回は彼女の卒業式に出席するための訪問でしたが、目的はもうひとつあったのです。

最初に娘に会いにドイツに行ったのは四年前の夏でした。帰国して間も無く、ふと神戸新聞をめぐって

ると、フライブルク市立フィルハーモニー管弦楽団演奏会という広告が目飛び込んできました。早速、夫と明石での演奏会に行ったときのこと、休憩時間にロビーに出ると、オーケストラのメンバーも三人出てきました。思わず声をかけ、ドイツを訪ねた話などすると、その中の一人が最終日の神戸公演にもう一度来ないかと誘ってくれ、再び神戸へ。コンサートの後、気がつけばメンパー二人を車に乗せ我が家に向かっていました。日本酒や残り物でワイワイやり、ホテルに送り届けたのは夜中の二時ごろでした。

そして、今年ついにフライブルクでの再会を果たしたのです。バイオリンストの自宅で朝食をご馳走になり、かなり古いフォルクスワーゲンで、郊外にドライブに。オペラハウスのバックステージを見学後、夜はチェリストの家でワインとチーズ、そこはまるで映画に出てくるような築百年の石造りの瀟洒なアパートで、螺旋階段を昇った最上階の部屋でした。お互いに自宅を訪ねあうという最高のご縁でした。

また、お便りします。どうぞお元気で。





NZ南島グレンレア農場

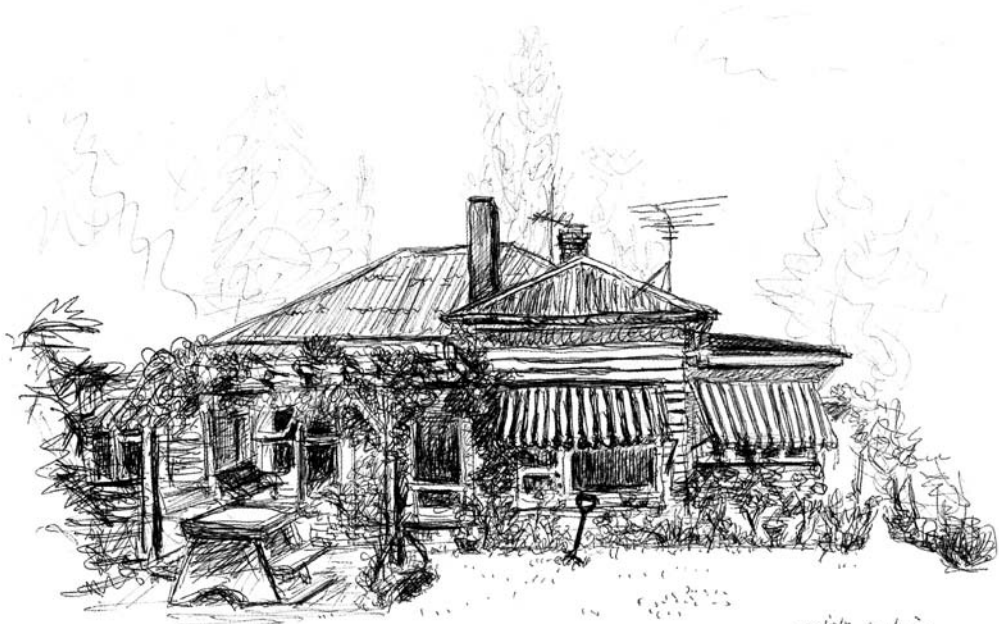
世界地図を広げると日本の真下、南半球オーストラリアの右下に日本とよく似た格好の細長くて小さな島国があります。そこは今、真夏のニュージーランド（以下NZ）。地球の裏側のこの国に八六年から九二年まで住んでいました。夫から赴任を知らされたときは、NZがどこにあつてどんな国か全く知らず、漠然と羊がいる国としか。でも、初めて飛行機から見るとその国はまるで絵本に描かれたパッチワークのように緑、黄緑、赤茶、こげ茶色の牧場が一面に広がり、その中に白いゴマのように羊がたくさんいました。

いよいよ着陸、NZ上陸です。幼い子供二人を連れて言葉もわからず不安で一杯のスタートでしたが、人懐っこく、優しいNZ人に温かく迎えられました。

困っている人に声をかけ、弱い立場にある人に手を差し伸べ、客人を温かい紅茶とビスケットでもてなし、普段着の家を招く。私は、ホスピタリティーとは

何かをこの国で学びました。今では、NZが第二のふるさとです。NZに里帰りする時は、スーツケースにいっぱいお土産を詰め込んで、友人宅にホームステイ、時には友人の農場でファームステイです。ファームでは夜、外に出て満天の星、天の川に抱かれて南十字星に見入ります。どんな高級な五つ星のホテルよりも快適です。普段着の食事がならば、笑い声が絶えず、暖かくやさしい空気で満ち溢れています。

ここグレンレア農場は夫のNZでの教え子の家ですが、今では親せき付き合い同然です。毎回、ビジュアルブック（宿帳みたいなもの）にお礼のコメントを残すのですが、世界中からゲストが来るこの家には我々の日本の友人たちの名前も毎年のようにどこかに残っています。びっくりするのは、大学生のときに旅行でここを訪れた男性と後に縁あつて神戸で出会い、数年前にわれわれが仲人をしたということもありました。同じ食卓を囲んでワイワイやるという楽しみに目覚めた我が家に、いったい何人の外国人がうちに泊まったか、何回友人を招いて夕食をともしたか、何本のワインを開けたのか、何回得意のちらし寿司を作った



9/31/04 Untari

か、数えだしたらおかしくなって大笑いです。さて、
今年はどうな客人がやってくるのやら、楽しみ楽し
み。



孫よ！ 娘よ！

二月十三日の夜のことでした。新しい命が誕生しました。私たちの初孫です。翌日、病院で初めて見たほんとうに小さな女の子は、愛らしくて、すやすや眠り、寝顔は天使でした。昔と違い、最近はお父親も立ち会って出産に臨めるとかで、陣痛のときからずっと二人でがんばったようです。母親となったお嫁さんは、今迄で一番美しい顔をしていました。名前は息子が付けました。母、つまり私ゆかりの「ゆ」、妻きみえの「き」、義母はつえの「は」、それぞれ頭文字を一文ずつ並べ、「ゆきは」と名付けました。一生懸命考えたのでしよう。私も二十九年前に同じ神戸の病院で息子を産みました。夫が息子を抱き、その回りにはたくさんのお父さん。今、あの小さかった子が父親になってわが子を抱いているんだ、お父さんになったんだ、と思うと胸の奥が熱くなり、体内を温かいもので包まれているような不思議な感覚でした。

それにしても赤ん坊の力はすごいものです。何も話さないのに人を集め、どの顔も笑顔に変えてしまうのですから。小さな命、しつかり育て。

さて、今度は私たちの大きな娘を紹介します。息子の後、年子で生まれてきました。彼女は三歳から十歳までニュージーランドで育ちました。帰国の飛行機の中で「私は、ニュージーランダー？ ジャパニーズ？」と、聞いてくるぐらいでした。とにかく本が大好きで日本に帰ってから読む本は英語、趣味はピアノを弾くこと。数学は十段階の二、それでも、「ニュージーランドでは天才やったのに」と言い切る豪快さ。そんな子が日本の枠に収まりきるわけはなく、大学はカナダへ、大学院はドイツへ、院在学中に南アフリカの大学とインドの大学で学び、インターンシップはトルコの国連事務所。今？ 初めての姪っ子に対面して、そのお宮参りの翌日に、南米ベネズエラへと飛び立っていきました。任地では環境省で二年間働きます。ついこの間まで、彼女もちっちゃな赤ん坊だったのに……

孫よ、娘よ、でっかい人間になりなさい。



2010.3.22 娘と孫 Waka